

## 空也の活動の歴史的意義について

——大般若経供養会を中心として——

## 東館 紹見

日本仏教の歴史を通じて、聖と呼ばれる宗教者が史料上に散見する。彼らの活動は、山林での隠棲・修行、あるいは諸国遊行とそれにとまぬ念仏などの民間への伝道や勸進、種々の利生事業の実践など多様な形態をとるが、いずれも自らの属する既成寺院を離れて活動している点に共通した特性を見出し得る。こうし

た聖の活動形態と特性から、従来の研究の多くは、彼らの行動を、大乘仏教本来の衆生救済思想の実践、あるいは既成の大寺院・教団への批判的態度の表現として評価してきた。本報告で取り上げる空也(九〇三—七二)に対しても、上述の聖の活動形態・特性を具備した先駆的かつ典型的人物として、大乘菩薩道の精神に基づく民衆救済の具体的実践者、当時の国家体制や既成寺院への批判者であるとの位置づけがなされてきた。しかし、そうした従来の評価とは別に、近年の中世寺院史研究の進展により、聖が既成寺院の周縁に位置し、寺院と密接な関わりを持ちつつ、顕密仏教への人々の信頼を促す、顕密仏教発展の原動力としての役割を果たしたことが指摘されてきている。かかる近年の研究動向は、それ以前の「仏教の民衆への開放↓民衆の解放」といういわば定型化された見方に、聖の活動に関する評価を軸として鋭く反省をせまるものであり、ひいては、鎌倉期仏教の「民衆的性格」を我々が何処に見出してゆくかという視点にも関わる重要な指摘を含む

ものである。向後は、右の研究動向を踏まえ、聖として位置づけがなされてきた人物の活動について、彼ら自身の意図を探ることとともに、それが国家・貴族層・既成教団等によって何故記録され評価されなくてはならなかったのか、その意味を考察することが改めて必要とされていると思われる。本報告は、国家・既成教団によって聖の活動が初めて本格的に注目・掌握された事例として、平安京での空也の諸活動、就中、九六三(応和三)年八月二三日に鴨川岸において行なわれた大般若経供養会を取り上げ、その歴史的意義について再検討を試みようとするものである。

近年の平安京都市論の成果によれば、十世紀後半の平安京は、国家体制の象徴的存在としての従前の役割に加え、当時の国家の中心都市としての実質的役割を果たし、それにとまぬ諸司諸家の家産支配機構に属する人々の集住により、貴賤の混在する複合的社會を形成しつつあった。またその一方で、疫病・災害の頻発による都市としての脆弱さの露呈という深刻な問題も抱えており、これに対する賑給などの国家による救済施策は行き詰まりをみせていた。すなわち当時の平安京には、貴賤混住という状況を説明し、同時に新たな「救済」のあり方を提示し得る思想の登場が待たれていたといえよう。天慶年間以降の平安京での空也の活動が、もはや抑制・警戒されることなく、貴族層・民衆を問わず受容されたのも、それが上記の平安京の状況に対応するものとして承認されたからに他ならない。ことにこの大般若経供養会に際しては、内裏から銭貨が給され、左大臣藤原実頼らの公卿や六百口の既成教団の僧侶が参列する中、大般若経最後の会座である竹林精舎を模した宝殿において、紺紙金字の大般若経が盛大に供養されていた。その開催に国家・貴族層・既成教団の協力が不可欠であった

ことは明らかであり、従来のようにこの供養会に、国家・既成教団への批判的態度を読み取るうとする見方は再考を要しよう。

この供養会の意図について史料をさらに詳しく見てみると、その願文には、あらゆる人々の成仏得果による災異消除と現世安穩が願われ、国家による従前の大般若経供養会や御霊会の性格が継承されていることが確認できる。しかし、それとともに注目されるのは、大般若経に説かれる法涌菩薩の説法と常啼菩薩の求法が、供養の対象である大般若経と主催者空也にそれぞれ対応する形で表現されていることである。これは市中における法会開催の経典上の根拠を初めて明示したもので、それまで行なわれていた大般若経供養会への新たな性格の付与ともいえよう。さらにこの金字般若経供養会という形態は、『南嶽思大禪師立誓願文』によって、中国天台第二祖の南岳慧思に先蹤が求められるものであることが知られる。慧思の法華思想形成には、般若經典が重要な役割を果たしたことが指摘されており、就中、慧思の般若経供養は、末法思想に基づく彼の衆生救済の実践行と位置づけられるものである。これらからすれば応和三年の大般若経供養会は、法涌・常啼菩薩の物語と慧思の実践行とに准えた、天台宗の衆生救済思想に基づく法会であったということができよう。実際、この供養会に際しては、書写料として「半錢一粒」の喜捨が勧募され、万灯会・菩薩戒の授戒・弥陀念仏・乞食比丘百余人への供養などの行事が併催されているが、これらはいずれも、あらゆる階層に属する平安京住民の結縁・救済が可能な法会であることを、天台宗の一乗成仏説に基づき可視的に表現することを意図したものとみなされる。以上の事情より考えるならば、この大般若経供養会の意図が、従前の大般若経供養会や御霊会にみられる災異消除・現世安穩の性

格を継承しつつ、それを救済思想としての天台宗の一乗成仏説の文脈上に位置づけ、住民各層の参加により挙行してみせる点にあったことが首肯されよう。なお、この経供養会と時を同じくして、内裏清凉殿では諸宗の僧侶によって「応和の宗論」として著名な法華経供養会が行なわれ、天台宗の良源が、自宗の一乗成仏説の正当性を宣揚しているが、この二つの経供養会は表裏の関係にあり、同じ天台の救済思想の理念と実践とを互いに補い合う形で表現しようとしたものであって、対立し合うものではない。

こうした天台宗の救済思想に基づく法会の開催は、上述のように平安京の住民各層の要求に対応するものであったが、同時に天台宗にとっても、自立した権門への転成を期し、社会との関係の緊密化を進めてゆく上で重要な手段であった。すなわち、まず第一にそれは、天台宗の一乗成仏説の救済思想としての有為性の可視的表現として、貴族層の支持を得るに有効であった。さらに、当時の平安京が、国家の中心都市として流通の中心地であったことを思えば、そのような法会の開催は、荘園の拡張と維持が緊要の課題であった天台宗自身にとっても有益に作用したといえよう。これ以後の平安京では、その周辺に天台宗によって拠点寺院が開創され、一乗成仏説にもとづく市中講会が多様に展開されてゆくと、空也の大般若経供養会は、まさしくそうした市中講会の先鞭を付けた法会であると位置づけられよう。

空也の活動は、彼自身の意図はともかくとして、国家・貴族層および天台宗に承認され包摂されることによってはじめて可能となったのであり、そうした彼の活動が、聖「民衆教化者」の先駆的・典型的形態として記録され評価されていったのも、彼らにとって空也の存在が有用であったからに他ならないのである。